

4. センの生活機能と社会福祉の生活問題

① 情動的基礎

ところで厚生経済学的な貧困へのアプローチにおける情動的基礎は、所得は厚生を規定するという前提で所得情報である。センはこの構造に反対して「厚生」に替わる新しい人間の幸せの基準を「ケイパビリティ（潜在能力）」として、その構成要素である生活の諸機能（Functionings・基本的ケイパビリティ）を情動的基礎において貧困を測ろうとする。

基本的ケイパビリティとは、その社会の貧困を測るための基礎的情報であり、人間の幸せな生活を構成する諸機能『「適切な栄養を得ているか」「健康状態にあるか」「避けられる病気にかかっていないか」「早死にしていないか」「幸福であるか」「自尊心をもっているか」「社会生活に参加しているか」¹』などである。

このようなケイパビリティ概念の提示、貧困へのケイパビリティ・アプローチは貧困測定における情動的基礎を、所得情報のみから、多様な生活情報（幸せを構成する諸機能）へと拡大を図ったと言う意味あいをもって捉える事ができるであろう。

② 基本的ケイパビリティ

基本的ケイパビリティの内容を、人間における自然的要求、文化的要求と言う二つの要求との関連において考察し、基本的ケイパビリティとこの二つの要求との関係を考えたい。

「適切な栄養をえているか」とする問いには食事に係わる要求とその欠乏の原因、これに影響を及ぼす事項について検討せねばならないであろう。まず身体的な消化機能の減退に加えて、精神的不健康、食糧調達の齟齬、社会的禁忌などが考えられる。後者は文化的な原因だが、栄養を得たいという要求は、これら社会文化的要求の齟齬を含みつつも、生物学的、身体的要求であり続ける。そこでこの基本的ケイパビリティは、自然的（身体的）であり、かつ社会文化的な要求を含んでいると言う重層構造にあると考えねばならない。

「健康状態にあるか否か」については、健康概念は時代を追って変化しており、かつては病気でないことが健康だったわけだが、現在の WHO 憲章前文では「健康とは、完全な肉体的、精神的及び社会的福祉の状態であり、単に疾病又は病弱の存在しないことではない。」とするなど、健康概念は時代的に変化するので文化的な要求を抱えていると言えよう。

また「避けられる病気にかかっていないか」についても、避けられる病気か否かとはその時代の医療技術の発展にも影響をうける社会文化的文脈の内側にある要求と思われる。

「早死にしていないか」についても、「早い」という相対的な表現には生物学的死の訪れについても、日本では長い歴史時間において「人生 50 年」であった所、高齢化社会の今は

¹ アマルティア・セン『不平等の再検討』P59 岩波書店 2000年12月

80年となっているので、この基本的ケイパビリティも生物として普遍的に訪れる死であって文化的側面を抱えている。この要求も自然と文化の双方にまたがる要求と言えよう。

そして「幸福であるか」、「自尊心をもっているか」については最も文化的、社会的な要求であろうが、この要求の欠乏が長く極まれば、様々な病、身体的不健康を引き起こす事は良く知られている。そして「社会生活に参加しているか否か」については、ついに社会的要求であり、文化的な要求というべきであろう。

以上、基本的ケイパビリティとされる項目は、自然（生物）的要求と文化的要求の重なり合いを抱えており、より文化的要求の側面が拡大していると理解される。

ところで物（生活物資）の多寡と人間の「幸せな生活」を直接的に関連づける「厚生」とはちがって、ケイパビリティの構成要素である諸機能（ファンクショニングズ）は物（生活物資）と「人間の幸せ」の間に、個人の財活用に係わる選択肢、実現可能な方途を介在させ、財をどう活用できるのかを問題にする。その事によってケイパビリティ（その人の実現可能な豊かさ）は、個人の要因（障碍、病弱、学歴、知識等）と家族、その個人が生きる社会のあり方を、「人間の幸せ」を決する重要な事柄として、問題にできるのである。

（※個人の財活用に係わる選択肢、実現可能な方途、財活用行動の自由度を、個人の自我作用の展開、その結果と置きかえる事ができるとすると、ケイパビリティは個人の自我作用とその展開、その『自由』に規定されることになる。自我作用とは、人間に普遍的で固有な思惟力として存立されつつも、人類普遍的な質と方向性をもつ作用ではなく、時代や社会の文化の在り方、個人的、家族的な条件から大きく影響を受けており、地域的社会的な制約をうける文化的事象である事を伺わせる。）

③ 社会福祉的な貧困問題と基本的ケイパビリティ

センの基本的ケイパビリティに取り上げられている事項は、厚生経済学が進めた所得情報だけに依拠する貧困測定、その情報的基礎の狭隘さに対して、社会福祉の側の伝統的なアプローチである生活問題へのアプローチに近く、人間生活の多焦点的、多軸的構造をとらえて列挙されていると考えられる。

センによる、基本的ケイパビリティの構成要素、機能概念 {ファンクショニングズ (functionings)}、機能空間による貧困の測定は、近代厚生経済学的な極度にシンプリファイして対象を把握しようとする手法、所得情報と言う単一の情報により貧困を測定しようとする手法、いわば19世紀的近代科学主義的手法の結果として生じる限界への、一つの対応関係であったとも理解される。

これらの関係を社会福祉の側から眺める時に、センの厚生経済学批判は、社会福祉の伝統的な貧困へのアプローチ、生活問題としての貧困問題というスタンスと共通性を持つ思考方法と考える事ができるのではないだろうか。

基本的ケイパビリティの構成を眺めると、人間生活を構成する自然的生物学的要求と社会文化的要求を、生活の具体である一場面一場面毎、一事項一事項毎において、その重なり合いをすくい上げるようにして設定されており、センの基本的ケイパビリティは、人間生活の自然的、文化的な要求双方を捉える事ができる設定であると理解できる。

まとめ

かつて「相対的貧困が絶対的貧困にとって代わり、もはや相対的貧困の時代が到来した」と考えられたように、今や貧困問題は相対的貧困から社会的排除へと移り変わりつつあるのだろうか。財・サービス空間によるアプローチは時代遅れであろうか。

貧困とは、文化的状態に移行した人間における生活問題として、自然的（生物的）要求でありながら、文化的社会的要求として満たされるべく複合的な要求への窮乏（欠乏）と考えられる。そのため貧困総体は、その二つの次元（自然的生物学的要求と社会文化的要求）の窮乏（欠乏）の重なり合いを、その双方を抱え込んでいると思われる。

人間は決して自然状態にもどる事はできない存在として、社会的個人を生き続けねばならない。そこでこの文化状態における要求が膨大な時を刻んで複雑化、拡大しつつあるのだが、一方では自然的生物学的な「死」をめぐる自然的（生物学的）要求は喪われる事ができない。人間生活は、その二つの次元を抱えつつ、自然的（生物学的）要求は、人間という「死すべき存在」において、消えることはできない 2 項対立構造の一方を永遠に形成し続けていくであろう。

この二つの要求への窮乏（欠乏）は、自然（生物的）要求を主として文化的要求を従と考える事も出来ようが、従の部分である筈の文化的要求は時代とともに複雑化し拡大して、人間生活の全分野を覆い尽くしている事も確かである。この二項対立構造はどちらか一方の側に重きを置く価値体系を内包するのではなく、等価な対立関係と思われる。

文化的要求やその窮乏（欠乏）である相対的貧困や不平等問題は、時代とともに（通事的に）その焦点を移しつつ拡大しつつ変換するけれども、貧困概念全体は、この構造を抱えて、時代を越えて（共時的に）、自然と文化という二つの次元の要求への窮乏（欠乏）として、一方が他方を吸収して消滅せしむる事はできない構造にある。これが貧困の構造ではないだろうか。

——貧困の三角形へ——